

世界一暮らしやすいまち、優しいまち、幸せなまちになって欲しい。

—— 株式会社ジーエータップ 代表取締役社長 定村俊満氏



定村 俊満(さだむら としみつ)

1951 年生まれ。NPO FUKUOKA デザインリーグ副理事長、社団法人日本サインデザイン協会常任理事、山口大学工学部非常勤講師。

専門領域は環境デザイン、コミュニケーションデザイン。

地下鉄七隈線のトータルデザインが世界で評価され、京都、オスロ、ヘルシンキ等、多くの UD 国際会議で基調講演をおこなっている。

企業利益を作るためのデザインが進んだ 25 年

私はデザイナーですので、長いデザインの歴史から最近の時代の趨勢を私なりに解釈したいと思います。

人類の最初のデザインは「石器」に現れていると思いますが、デザインは非常に長い歴史を持つ、人々の生活や社会と切り離せないものであると思います。このデザインに関して、産業革命以降、大きな変化が訪れました。

産業革命後、従来の手作りの生産活動が機械による生産活動に置き換わり、その結果大量生産による安価な、しかし粗悪な製品が世にあふれ、人々の労働に対する喜びがなくなった時代になりました。このことを批判したウィリアム・モリスは 19 世紀後半に、中世の丁寧で美しい手仕事に回帰するよう「アーツ&クラフツ運動」を進め、多くのデザインに関わる芸術家に影響を与えました。

その後ドイツでは工芸・写真・デザインなどを含む美術と建築に関する総合的な教育を行った学校バウハウスが設立され、統合的な知見を持った識者を輩出しました。一方、アメリカでは「マーケティング」の概念が生まれ、コカ・

コーラ社が初めて企業戦略にマーケティングを活用するなど、デザインと経済・社会のつながりが緊密になりました。

20 世紀前半は、GM 社が「モデルチェンジ」という“計画的陳腐化”の手法で消費の刺激を進め、フォード社を逆転した「産業デザイン」の勃興期でした。その流れから、20 世紀中盤以降は、いよいよ大量生産・大量消費・大量廃棄の「スクラップ・アンド・ビルド」の時代へと突入しました。

2000 年以降は情報化デザインの時代に入りましたが、デザインの思想は従来の流れ通り、生活者のためのデザインではなく、売るためのデザインに終始してきました。自由資本主義によって、資本家と経営者が切り離され、経営者は生活者のためではなく株主や短期利益のために努力する傾向にあります。この 25 年は特に企業がユーザーから離れてしまった、企業利益を作るためにデザインが進んだ時代だったのでないでしょうか。

新しい価値観が「幸福」となる 25 年

東日本大震災後、4 月初旬に私は現地入りし

て惨状を目の当たりにしてきました。そして、デザインで何ができるかを考え続けています。これは震災に限った話ではありません。世界中で人々の不幸をもたらしている貧困の問題。この貧困に対しても、デザインで何ができるかを絶えず考えています。

哲学者の梅原猛さんが震災後、被災者の美德をたたえ、政治家や実業家は道德心を失ったと疑問を呈した上で、「今こそ、経済力だけでなく、新しい価値観で世界に範を垂れる国をつくるときだ。」とおっしゃいました。私はここで言う新しい価値観こそ「幸福」ではないかと思うのです。ですから、「幸せのためのデザイン」をやっていきたくと思っています。

また、ノーベル経済学賞を受賞されたダニエル・カーネマン教授は幸福の種類を「フローの幸福」と「ストックの幸福」に分けています。フローの幸福は瞬間的なもので、その瞬間以降は幸福が減っていく、例えば競馬に当たったようなタイプの幸福です。逆にストックの幸福は、家族や友だちとの関係や奉仕活動によって得られるような、持続される幸福です。この幸せの持続が非常に大事だと思います。これからは、みんながずっと幸せに居たい、というような社会を目指さないといけないのではないのでしょうか。

ユニバーサルデザインは幸せのためのツール

さて、私はユニバーサルデザイン（UD）に関して様々な仕事をしているわけですが、この分野は一見マーケットの規模が非常に小さいため、冒頭申し上げた、大きな企業利益をつくるためのデザインとはいえません。

また、UDは「エコ」同様、企業にとっては利益を生まない投資であるため、熱が冷めるとすぐ流行遅れになる分野です。収益を生み出すエコビジネスだけが進み、中国も「経済成長が落ち着けばエコをやる」と公然と態度を表して

いるように、世の中の価値観は依然経済重視なのです。

しかしながら、UDというのは決して障害者のためだけを思って取組むものではありません。UDを進めることで、健康な人にとってもものすごく快適な社会構造になっていくのです。例えば、七隈線のデザインは世界でも評価されているのですが、七隈線のホームから改札階に向かうエレベーターは、通常よくあるホームの端っこに設置されているのではなく、身障者用の設備がある車両が止まる真ん前に設置されています。もちろんこのデザインは車椅子の方にとって優しい作りですが、怪我をした人、妊婦や今後激増する高齢者にとってもとても優しい作りになるのです。また、例えば、博多駅では入口や出口の方向に向かって、色分けをして誘導するデザインが取り入れられていますが、これも健康な人にとって分かりやすい目印になっています。

このようなハード面のUDは、みんなが幸せな社会を作る最初の一步だと思います。福岡銀行がすべての店舗に介護士資格を取った社員を配置して、必要な顧客にサービスをする取り組みを行っていますが、ハードでの対応にも限界がありますから、このようなソフト面でのUDもこれから重要になってきます。

暮らしやすいまちから優しいまちへ

福岡市は以前「アジアで一番住みやすいまち」と評価されたかと思いますが、それについて、市民はとても誇りに感じたと思います。この暮らしやすいまちを作るのに、生活弱者も自立できるようなハード整備やUDを進めてきた結果だとも思います。

私は、福岡市は「世界で一番幸せなまち」になることを目指して欲しいのですが、それを目指すためには、次のステップで「みんなが優しいまち」にならないといけないと思います。こ

れは先ほど申し上げた、ハードだけではなく、ハードの不整合を解消するためのソフト面での努力、お互いがお互いのことを思いやり、支えあう気持ちが必要になります。

2008年に世界の幸福度調査が行われまして、国別ではデンマークが首位で日本は43位でしたが、富の所有は必ずしも幸福ではないということに人間は気づき始めていると思います。共同体内の連帯感や、感謝の気持ちなどの人間同士のつながりが幸せをもたらします。そういう意味では、福岡市では優しいまちになっていくための市民全体の盛り上がりには欠けていると思います。

以前、渡辺通りの巨大な出会い系サイトの広告が市民の不評をかいましたが、行政では法的に対処するすべがありませんでした。それを最終的に撤去させたのは、市民組織とそれを後押しした市民の声だったはずです。これから福岡市がよりよいまちを作っていくには、行政の計画だけでは進めることは難しく、市民がどれだけその中に入り込めるかにかかっていると思います。

福岡にはポテンシャルがある

みんなが優しいまちの実現で、まちに支えあう喜びや幸せが生まれます。このような生活の質と幸せの価値を発信することで、福岡は世界に愛されるまちになると思います。

福岡市はアジアの玄関口で、中国・韓国を筆頭に海外から多くの人々が訪れますが、このような人々に情報を伝達する際にUDが必要です。また、福岡は東京や北京のようなメガシティとは異なり、適度にコンパクトで人口も極端に多くありません。そのため、私が北京のパラリンピックの時に天安門広場のUDを半ば諦めたようなことは発生しにくく、UDの細やかな実践が可能だと思います。

さらに、福岡は平坦で坂の少ない地形であっ

たり、七隈線の先進的な取り組みがあったり、民間を巻き込んだ活動が行われていたり、UDに取り組むためのポテンシャルが高い都市だと思います。このような利点を認識した上で、是非世界に愛されるまちになり、世界一幸せなまちになって欲しいと思います。

コミュニティを復活させよう

北欧の高福祉社会では、実は人間と人間のつながりが希薄になっているそうです。自分の親の面倒は国や政府がパーフェクトに見てくれるので、安心して連絡を取らなかつたり、頻繁に往来しなかつたりするようになるそうです。

日本は将来、高福祉社会に向かうべきですが、経済がこれから右肩上がりにはなりませんので、このような北欧のやり方で進めることはできませんし、こうあるべきではないと思います。政府に頼るのではなく、日本が古くから持っていたモラルや、コミュニティ本来の機能、本来の力を取り戻さないといけないと思います。今回の大震災でも、避難所がコミュニティ単位になっていて、空間や食事を皆でシェアすることで、困難な状況下でも小さな幸せを生み出しているように思います。

私が小さい頃は、隣の家に預けられたり、両親が留守にする時は食事を隣の家族と食べたりしていました。とても幸せだったと思います。こういう日本本来のコミュニティに根ざす良い価値観を福岡で復活させるべきではないでしょうか。

インタビュー日:2011/7/7 文責:URC 天野